

説教 『福音か律法か、神か人か』 山本 護 牧師
聖書 箴言 8:35~36 / ガラテヤの信徒への手紙 2:11~16

傍流伝道者のパウロが、いわば本山の代表者ケファ=ペトロを信徒の前で面罵した(ガラテヤ2:14)。これは、そんなこともあったのね、とやり過ごすことのできない重要な出来事であった。ここが福音を唱える教会が立つか倒れるかの分かれ道。パウロが目上のペトロを気遣い、後で進言したり、穏当に応じていたら、教会は「ユダヤ教イエス派」という従来民族宗教に納まっていたかもしれない。

ペトロは素朴で気のいい人物。本山エルサレム教会の長になっても偉ぶることなく、パウロが開拓したアンティオキア教会を訪ねた。ここではユダヤ人と異邦人が食卓を共にしていた。これは親密さの現れだが、律法が大事なユダヤ人には許しがたい。ペトロはとまどいつつも、「なんだか、いいじゃないか」と異邦人と飲み食いしていた。ところが本山から口うるさい使者がやって来ると、ふるまいがぎくしゃくする(2:12)。ペトロばかりではない。他のユダヤ人やバルナバも、腰が引けた態度に豹変する(2:13)。アンティオキア教会は大らかではあるが、その基盤はこのように脆いものであった。

パウロはペトロを面罵する(2:14)。盟友バルナバも頼りにならず、パウロは孤立するが鷹揚ではいられない。彼は尊大な強面ではない。どちらかいうと静かな人情家で(Ⅱコリント 10:10,使徒 20:31)、態度も相当柔軟である(Ⅰコリント 9:19~23)。ところが、このアンティオキアでの出来事は曖昧にできず、他地の教会にも伝えないではいられなかった。あらゆる教会が抱える「福音か律法か」の問題だからだ。

それでは、なぜ曖昧にできないのか。「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされる~律法の実行によっては、だれ一人として義とされない(ガラテヤ2:16)」から。これまでもくり返し聞いた御言葉であろう。「信仰の義」は、権威によっても、人間関係を良好に保つ配慮によっても、曲げられてはならぬ。両者の衝突は、教会を導く聖霊の助けであったのかもしれない。

教会の空気にも律法は混じる。そしてそれを察する自己規制によって現実となる。律法の空気、気にしなければ無いも同然なのだが、教会世間では、私のような無神経でさえ気にしてしまう。弱さへの配慮や、聖潔さへの憧れという感じならいいが、いつのまにかそうした空気が強制になる。やがて「救いの条件」が暗に匂わされれば、それは律法の信仰であり、パウロのごとく黙ってはいられまい。

「福音か律法か」は、救いの主体が「神か人か」と言い換えられよう。どの教会でも、まさか人間の努力で救われるとは言えない。だが、人間の態度次第で救いが手厚くされたり、神を喜ばせて恵みを奪取するかのとき律法的な教会は少なくない。救いの御手が人間の作為で濁ると、人は物化されてしまう。隅々まで神のものであるならば、私たちは人格を得、創造された私が底の底から尊ばれる。

「キリストへの信仰によって義とされる(2:16)」。十字架のイエス、復活されたキリストがいかに私のためであったか。その真実をどっしり受け、感謝し、喜び、涙を流す。私はこうして義とされる。

「わたしを見失う者は魂をそこなう。わたしを憎む者は死を愛する者(箴言 8:36)」。どうかくり返し、十字架のキリストを見つめ覚えてほしい。自力という死に傾かないでほしい。そこには義も命もない。



【おまけのひとこと】

誰かを感じさせ 拍手させても それは義ではない 自分が自分の主人であってさえ 義ではない 評価は私を含めた世間の力であり 羨望であり 物質化である キリストは 私を思い起こさせる